キング文庫
女王蜂

女王蜂

キンク文庫

１１７ページ

【当画像集に掲載されている画像の、無断複写・転載・使用はかたくお断りします】

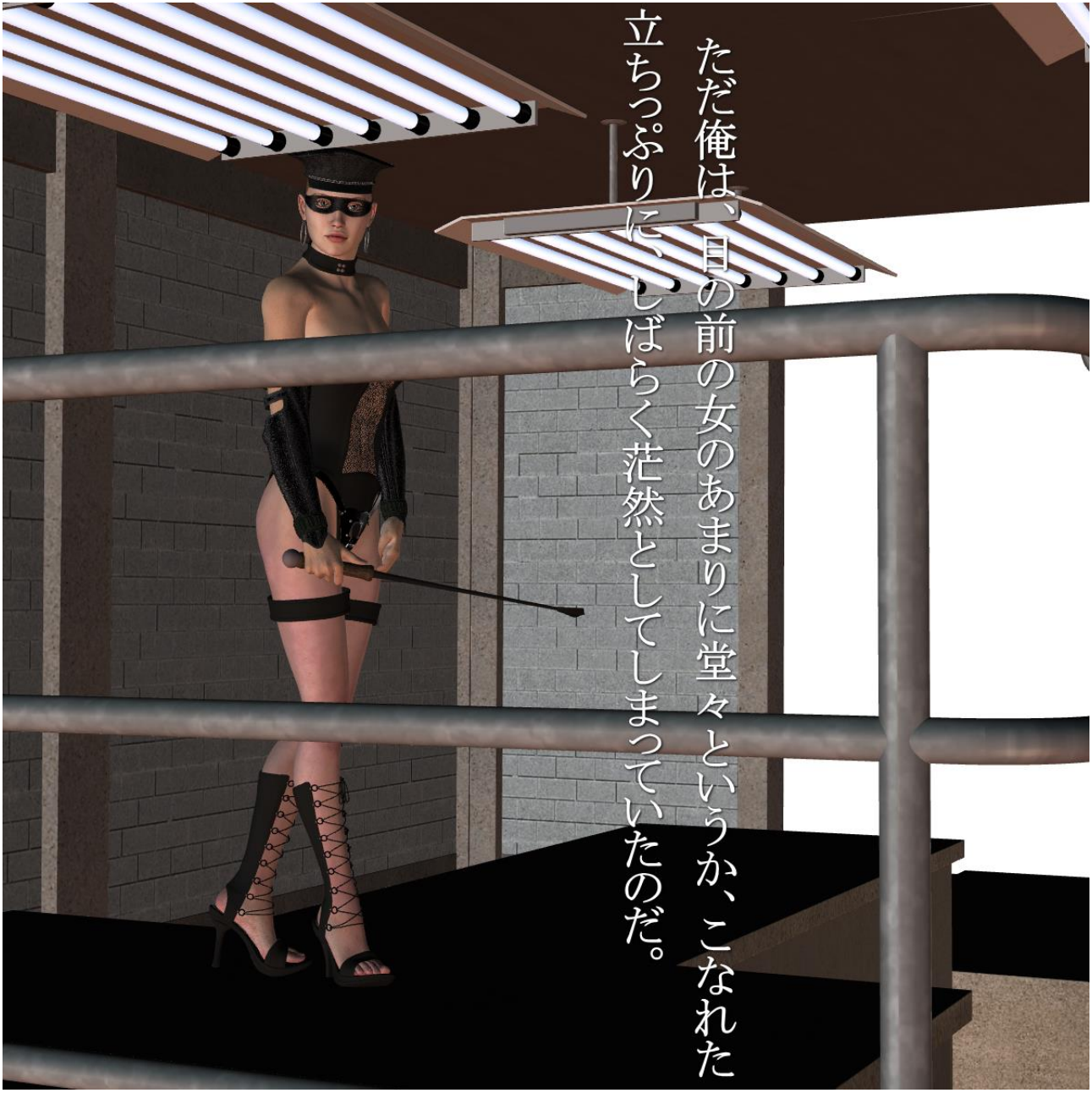
倉庫のような建物に呼ばれた俺。
「女王蜂」という屋号のついたドアを開けると、映画の撮影所のような雰囲気だ。
俺はモデルの面接に来たつもりだった――。

しかし倉庫の中には誰もいない――。

「――ん？」
視界の若干上の方から、異様な感じの黒い気配がした。

そこには奇抜な格好をした女が立っていた。
カメラマンや雑誌の編集者にしてはあまりにセクシーな
その女に、かなり動揺した俺。

「あ……あのぅ……モデルの面接……」
おそらくモデルの仕事には違いないだろうが、女の格好から推測するに、普通のモデルではないことは直ぐに判った。


ただ俺は、目の前の女のあまりに堂々というか、こなれた
立ちっぷりに、しばらく茫然としてしまっていたのだ。

「どうしたの？　早く上がってらっしゃい」
「は……はぁ」
（いったい、何のモデル撮影なんだ……）

（しかしこの女(ひと)は何者？　――ファッションモデルにしては卑猥過ぎるし、AV女優とかにしては上品すぎる感がある……）

(なんてセクシーな女(ひと)なんだ……それに
あんなキワドいというか……う～んたまんないぜ)

（おお……なかなかの長身じゃないか）
（それに……んぁあ……いい匂いだ）
「お尻ばっか見ないでくれるぅ？」
「あっ……」
（そっ、そうだ……モデルの仕事だった）